

第11回奈良ESD連続セミナー 概要報告

奈良教育大学 大西浩明・中澤静男

日時：2021年2月12日（金）19:00～21:30

方法：Zoomによるオンライン

出席者：【現職教員等】圓山、吉田、山方、島、石田、中澤哲、川崎、葉山

【学生】西條、櫓、上田、福井、足立、下原、狗飼

【大学】中澤、大西 計17名

内容【学習指導案の検討】

1. 「Rakugo Goes Overseas」(中学3年英語、総合) 櫓さん

落語そのものの面白さを実感させることで、生徒たちと落語との距離が少しでも縮まることを第一の目標とする。

生徒に落語の面白さを実感させるため、総合的な学習の時間と連携して生の落語を鑑賞させる。

英語科としては、各授業において4技能（話す、聞く、読む、書く）に関する活動をバランスよく取り入れたい。また、英語落語を体験させる活動を通して、楽しく英語を使用し身に付ける機会を設けたい。

◎大島さんが英語落語に挑戦し続けているのはなぜかを考える。

- ・(教科書本文より) She wants to share Japanese humor with people all over the world.
- ・(教科書本文より) She believes that to continue spreading laughter all over the world will make a more peaceful world.

◎「笑いを広めることが世界を平和にする」とはどういうことかをグループで話し合う。 など

落語を学ばせるのか、落語で学ばせるのか 学ばせたいのは何なのか焦点がぼやけている

「大島さんが英語落語に挑戦し続けているのはなぜか？」という主発問に対する答えをまずは明確にESDとしてのねらいと英語としてのねらいを共存させるのは確かに難しい。

総合としてのねらいとして、活動がきちんと固まっていることが必要

英語落語を見ていて、言葉が通じなくても表情や身振りなどで落語そのものの面白さは伝わるはず。

初心に戻って、何を学ばせたいのかを明らかにすることが大切。

2. 「情報の技術 ー情報技術を活用し、国際教育問題を学ぶー」(中学1年技術)

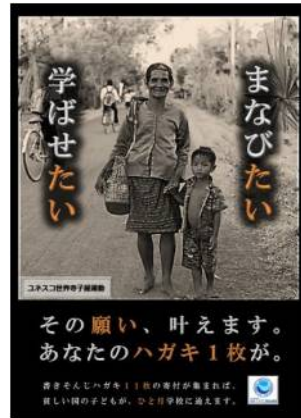
葉山泰三先生(附属中学校)

本実践は、学ぶ機会を失った人に、教育の機会を提供するために日本ユネスコ協会連盟がESDプログラムとして行っている途上国への教育支援活動「世界寺子屋運動」の国際支援を推進するリーフレットをコンピュータで制作する授業である。

→ 情報の技術を活用し、国際教育問題を学ぶ

本校では、カンボジア現地へ教員が取材に赴いて作成した自作教材を用いる。

また、ユネスコから提供される教材やユネスコのホームページ上にある教材を有効活用する。



メディアリテラシーの観点から

写真を切り取ると真実から離れてしまう危険性があるが…。

→ ユネスコが提供しているオフィシャルのものを使用するので問題はない
リーフレット以外でも伝えられる方法はある。

ユネスコの他の活動に参加する、勉強会に参加するなど、生徒の高まりがみられる。

10年続けてやっているのだから、教師自身の中でブラッシュアップできている。

3. 「奈良公園のナンキンハゼは全て伐採すべきか」(6年国語) 西條さん

児童が主体となって ディベートを行うことでコミュニケーション能力を高めることができる。

ディベートの題材を「奈良のナンキンハゼ」にすることで、身近なところにあるナンキンハゼが抱える観光的、景観的によい面と、自然環境、世界遺産に関わる悪い面の両側面を持っている問題について知り、考えるきっかけになる。

グループごとに学ぶ内容が違って来る

→ 共有するのは討論の場でもできる

ディベートの勝ち負けがESDの観点で決まってしまうと思うのではないだろうか。

ディベートとESD → 教師の力量が大いに問われる

ESDは、勝ち負けだけでない多様な意見があっている。

「一人ディベート」させることで、クリティカルシンキングにつながるのでは。

自分の意見を確立させることは重要だが、相手の意見を聞き入れたうえで自分の意見を言わせたい。

4. 「世界から画材が消えたなら」(高等学校美術) 上田さん

画材には〈色材〉〈支持材〉〈描画道具〉があり、絵画制作には欠かせない。しかし、それらがなくと仮定したとき、想定されるのが自然に存在するものを活用し、モチーフを構成することで、絵画的なアプローチを試みるということであろう。自然を使った芸術として、Andy Goldsworthyのアースワークを紹介し、生徒のインスピレーションを刺激し、自然素材のみによる活動を促す。

この実践では、自然環境にある「色」への着目にとどまらず、「自然の中にある音」、「質感」などに留意させることで、自然環境への関心や理解を深める機会とする。

・Andy Goldsworthyのアースワークの模倣に終わらせないために、作品の分析が必要だろう。要素に

分解した上で、それを重ねたり、並べたりと行った配色によって受け取る印象が変わってくることに気づかせると、理解が深まるのでは。

- ・使用する自然素材を集めるのは、生徒がした方がいいだろう。素材収集や作品製作にもっと時間が必要なのではないか。
- ・自然素材から自然環境に関心を向けさせるだけにとどまらず、人が感じる「美しさ」と「自然」との関係性を考えさせてはどうか。

5. 「戦争をしないために私たちができることを考えよう」(6年生社会科) 足立さん

第二次世界大戦後、70年以上にわたり平和な社会を築いてきた日本に住む児童にとって、戦争は身近なものとは言えず、切実感を持って学び、行動化を促すのは難しい。そこで、本実践においては、奈良で空襲を体験された方と子どもを出会わせる。まず、地域の戦争跡を取り上げたことと、今は少なくなっている語り部の方と子どものふれあい、直接の語りかけを取り入れたことが秀逸であると言えよう。

その後、世界では続発している戦争や紛争、テロの事実に着目させ、戦争が引き起こされる原因を考え、戦争を阻止するために自分ができることを考えていく。

・戦争やテロを実行する「国」や「組織」と「国民」を区別して捉えることは重要だ。第二次世界大戦を実施した「国」と、巻き込まれ、実際に攻撃や爆撃といった殺人行為に荷担することとなった「国民」を区別し、「荷担」せざるを得ない状況を作り出していったもの、メディア、教育、法などの社会システムに気づかせることで、「戦争をしないために私たちができること」を考えることができる。



・広島原爆祈念碑に「安らかに眠って下さい。過ちは繰返しませぬから」の文言に注目させて、この文言の主義を誰かを問うことで、戦争をしないために必要な「市民」の役割に気づかせることができるのではないか。

3. 「より良い買い物の仕方を考えよう」(5年生家庭科) 福井さん

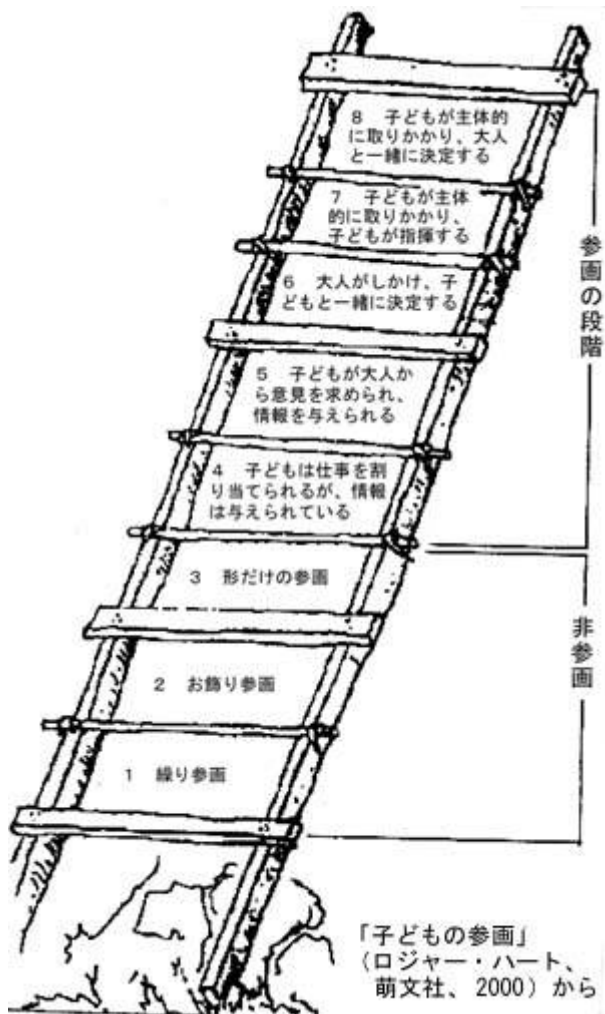
ごみ問題から、環境に配慮した消費行動について考える。学習後には、社会への配慮(フェアトレード商品の購入等)、地域への配慮(被災地の特産品の購入、地産地消等)、生物多様性への配慮(SFC森林認証商品の購入等)など、環境面以外にも自分たちの消費行動で世界を変えることができることに気づかせ、行動の変容を促す。

◇購入時

- ・価格や利便性だけでなく、環境のことを考えて商品や店を選ぶ消費者：グリーンコンシューマー
- ・必要なものを必要な分だけ購入する
- ・使い捨て商品ではなく、長く使えるものを選ぶ
- ・容器や包装のないものを優先する。容器は再利用できるものを選ぶ
- ・リサイクルされた商品、リサイクルシステムのあるものを選ぶ

◇購入後

- ・食べ残しをしない
- ・リサイクル、リユース、使い切る（リデュース）、修理して使う



- ・学習後の自らの行動の変革を確認できるようなシステム（アプリなど）があると、習慣化できる。
- ・学んだことを保護者や地域に発信し、子どもから大人を巻き込んだ運動に展開していく。
ロジャー・ハートの参画のはしごの8段階を目指す。